

NPO 純正律音楽研究会会報 ～2016年2月発行～

ひびきジャーナル



〒168-0072 東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 Tel:03-5317-0291
Fax:03-5317-0289 e-mail:puremusic0804@yahoo.co.jp

発行日 平成28年2月17日
発行責任者 NPO 法人 純正律音楽研究会
編集 相坂政夫

No.47



暦の上では春となりましたが、本格的な春が待たれる今日この頃です。会員の皆様いかがお過ごしでしょうか。昨年はいろいろとお世話になり誠にありがとうございました。今年もよろしく願い申し上げます。

本年最初のコンサートは3月27日(日)地下鉄茗荷谷駅近くの「ラリアル」にて開催いたします。この会場の定員は60名です。昼の部14時開演、夜の部18時開演と2回公演となります。ご予約はお早めをお願いいたします。

今年は玉木宏樹が亡くなって5年目に突入しました。玉木が生前、演歌やポップスをクラシック風に編曲した曲が多く残っています。一昨年その一部を「世界のメロディー日本の歌」「日本の調べ」2枚のCDにしました。まだ数多く残っている曲の中からこの度、CDをリリースすることになりました。3月末レコーディング、6月頃発売の予定です。

前回同様、協賛してくださる方々を募集いたします。

皆様方のご支援、よろしくお願い申し上げます。

子供達の無限の可能性を育てたい

洗足音楽大学教授・ヴァイオリニスト
NPO 法人 純正律音楽研究会 代表
水野佐知香

節分も過ぎ、暦の上にも春がやって来ました。会員の皆さまお元気でいらっしゃいますか？

作曲家でヴァイオリニスト、純正律音楽研究会の創設者玉木宏樹氏が天に召されて5年目になります。彼の残したものの遺作(作曲、編曲を含め小説、本等)がとても偉大で、どのように次世代に伝えていくべきか、これからの課題になっています。その中の彼が持っていた楽譜、CDの一部が私の手元にあります。彼が芸大時代に弾いたのでは？また当時ドイツからいらした先生が書かれたような筆跡の楽譜、ラフのソナタ、シンディングのソナタ等珍しい楽譜がかなりあります。(昭和30年代なので想像つかれると思います)

CDもバロックからポップスまで、12人のヴァイオリニストのCDまでもありました！(実はこのCDは玉木さん作曲です)とにかくどんなこともよく知り尽くしていて！世の中的にはまだまだ活躍して次世代に伝えて欲しかったと5年目に入っても思う日々です。ぜひ皆様、彼の偉業の本、CD等を聴いて読んでいただきたいと思います。

私は2月5日生まれですが、今年是一般に言われる赤いチャンチャンコを着る年になってしまいました。暦の上では3日から新しい年になりますので、新しい年が明けてすぐがいつも誕生日になります。今年はその記念の年の初めに、ハーブの三宅美子さんのお住まいの近くにありますが中野の保育園に三宅さんと「節分コンサート」に行ってきました。

まず、子供たちがお行儀よく整然といろいろなことができ、とても保育士の先生方に愛され、すくすく伸びやかにしていることにびっくり、コンサート会場となる保育園のホールのいすを子供たちがきちんと並べたり、ランチのときも整然と待っている姿を見て子供の頃の教育の大切さと、このような教育を受けた子供たちの将来がとても楽しみにになりました。

さて、音楽会は？と言いますと、キラキラとした目をした子供たちが本当に静かに元気によく聴いてくれて、いろいろな想像もしてくれました。まずは、玉木さんになりきってヴァイオリンでご挨拶！「ヴァイオリンさんが何てご挨拶したかわかる？」何人かの子供たちが「みなさん、こんにちは！」とわかってくれました。また、音楽が音色が表情が変わるたびに感じてくれたようで体を動かしたり、知ってる曲を一緒に歌ってくれたり！とてもとても楽しいあつという間の時間でした。とても嬉しかったです。また、ハーブの弦は？ヴァイオリンの弦は？等一緒に数えてすぐに覚えてくれました。大きくなっても覚えていてくれるかな？このまま育っていったら素晴らしい！私自身子供達の無限の可能性を育てたい！強く思わされた瞬間でした。

会員の皆様のなかで、ぜひこの学校へ、保育園へ、幼稚園へ、演奏してほしい！などご希望がありましたらぜひ事務局までお願いいたします。お待ちしております。

今年は、3月末に富士山のふもと「ふじさんホール」でのレコーディングが決まりました。伸びやかに玉木さんの音楽が響きが伝えられたらと思います。

3月にはいつものようにコンサートが27日に、5月は、みなとみらい大ホールで電子オルガンと、7月にはハンガリー国立オーケストラのコンサートマスターの招聘、マリンコンサート、現代曲のリサイタル、8月はあちこちのセミナーなど、10月にはウクライナにオレグクリサ国際コンクールの審査員にも招聘されています。

また、毛利文香さんと山根一仁さんが京都の青山賞をいただきました。

今年も走り出しました。頑張ってワクワク前に進みたいと思います。どうぞ、応援のほど何卒お願い申し上げます。

ムッシュ黒木の純正律講座 第46時限目

平均律普及の思想的背景について(35)

純正律音楽研究会理事 黒木朋興

今回は、純正律のハモリを重視した音楽は、神を象徴しており、それが故に「神中心」から「人間中心」の世の中へと移り変わった19世紀末以降、保守的な音楽として前衛芸術から批判の対象になった、という話をした。

芸術のモダン（近代／現代）化、つまり「神中心」ではなく「人間中心」という原理を掲げた芸術とはどういったものなのだろうか？

19世紀末以降のモダン（近代／現代）の時代においては、何をもって芸術とするか？ という基準、あるいは美の基準と言っても良いのだが、その判断は個人に委ねられることなる。この状況下では、何を描いているか不明な落書きのような絵でも、ノイズにしか聞こえない五月蠅い音楽でも、一人の人間がそれに触れて心を動かされるのなら、そこには芸術的価値があるということになる。また、創作の側の話でいうと、例えば感極まった人物が突然意味不明なことを叫び出したとしても、その行動は芸術的発露と見なされ得る。もちろん、このような作品あるいはパフォーマンスが芸術ではないということは断じてない。それどころか、特に20世紀には、特定のグループによってこれらのような作品が新しい芸術として賞揚されたことがあったのはれっきとした事実だし、現在においてさえそこに芸術の可能性を見出そうとする人はいるだろう。

しかし、このような作品／行為を芸術と見なすことこそが、実はモダン（近代／現代）という時代の重要な特徴の一つであったことを指摘しておきたい。

あるいは、これらは歴史を通じて常に芸術であったわけでもないし、今後もずっと芸術と見なされるとも限らないという言い方もできる。

ここで、モダン芸術の価値を決定する個人の判断とは何か？ということを知るために、その対極にある個人の判断に拠らない価値判断とは何か？について考えてみよう。それは、公な価値基準であり、かつての芸術はこれに支えられていたと言って良い。

かつて、この公な価値基準を定めていたのは、政治権力であったり、宗教権力であった。つまり日本で言う「お上」が美の基準を決めていたことになる。特に、西洋の場合では、神＝真理を表象するという目的の下、芸術が社会において重要な役割を担うようになり発展していったのだから、特に宗教の力が重要であることが分かるだろう。もちろん、神への信仰が芸術を支えていたと言っても、新興宗教のように真理なり美が一義的に決定されるわけではない。神といったものが、現世が続く限り決して人間の手の届かない存在である以上、何が美か？という問は永遠に決着のつかない問ということになる。ただし、にもかかわらず、目指すべき真理が想定されていることは確かであり、その真理への確信が様々なカノン＝規範の成立を促し、それに基づいて芸術作品が創られていたのである。つまり、芸術には唯一無二の正解はないものの、目指すべき方向は示されているという言い方も出来るだろう。

対して、そのようなカノン＝規範を積極的に破り、神や王ではなく人を中心とした世に相応しい美を打ち立てようとしたのがモダン芸術ということになる。問題は、公の規範といったものは、より多くの人に共有されるものなのに対し、個人の価値観に即した美はその人物以外の人にとって関わりのないものになりかねない、ということだろう。それについては次回。

**連続エッセイ【外科医のうたた寝】第36話
はまなす新春茶会**

純正律音楽研究会理事
福田六花（シンガー・ランニング・ドクター）

“外科医のうたた寝”と云うタイトルで書かせて頂いていますが、僕が外科医だったのは13～14年前までのことです。2002年11月に富士山麓の河口湖に＜介護老人保健施設はまなす＞が開設し、施設長に就任した時点で基本的には外科医から足を洗いました。その後もしばらくは緊急手術に呼ばれたり、関係者の手術をすることはありましたが、ここ2～3年はまったくメスは握っておりません。僕の現在の仕事は“老人介護”です。

僕が施設長を務める“はまなす”と云う施設は、入所者（病院ではないので

患者さんとは呼びません) 90名、ショートステイ 19名、グループホーム 9名、通所利用者 40名の大所帯です。それだけのお年寄りのお世話をするために職員は 110名います。平均年齢 90才近いお年寄りの健康管理と生活のお世話、そしてリハビリをさせて頂き、可能な限り自宅での生活に復帰できるようなお手伝いをするのが老人介護施設の役割です。生活のお世話とリハビリを行う他に、少しでも楽しい時間を過ごして頂くために、年間を通じて季節の行事をたくさん行っています。

たくさん開催している行事ですが、うまくいくこともあれば失敗することもあります。「行事の成功」とはなにか？答えはひとつ、お年寄りに心の底から笑って頂ければそのイベントは成功です。さまざまな試行錯誤を繰り返しながら、いくつもの行事を開催してきました。

1月の行事は<新春茶会>です。オープン初年度から<新年会>を開催したのですが、最初は失敗の連続でした。初年度は介護職員が屋内での凧揚げを企画してくれました。施設の天井に滑車を取り付けて、お年寄りにヒモを引っ張ってもらおうと、ヒモについての凧がスルスルと天井に向かってあがっていきます。これはまったくウケませんでした。翌年は巨大な福笑いを企画したのですが、これもまったくウケませんでした。

そして3年目。新年のお祝いには心を込めたオモテナシをしようと考え、お茶会を企画しました。施設内に紅白の幕を張り、正月らしいBGMをかけて、お茶の先生にボランティアで来て頂いて、100名を超すお年寄り全員にお茶とお菓子を愉しんで頂きました。

お年寄りの多くはお茶会の経験はなかったのですが、これは大好評でした。

「時代劇でしか見たことのないお茶会。美味しかったよ。」

「お正月にとっても素敵な経験が出来たよ。」

歓びの声をたくさん頂き、それからは毎年<はまなす新春茶会>を開催しています。

年の初めに美味しいお茶を頂いて、清々しい気分で1年が始まりました。

福田六花 近著

富士山1周レースができるまで (ヤマケイ新書)

(著者) 鏑木 毅、福田六花

CD レビュー 純正茶寮
〈 Sirventés 〉
純正律音楽研究会理事 黒木朋興

Sirventés – Chants fougueux des Pays d’Oc
Manu Théron, Youssef Hbeish, Grégory Dargent

レーベル : Accords Croisés

ASIN: B00OTZ9ESG



ヴォーカル、ウードとパーカッションの3人組による南仏地方（オクシタニア地方）のトラッド。更に詳しく言うと、中世のトルバドゥール＝吟遊詩人の音楽を基に創作活動をしているのだそう。なお、トルバドゥールとは南仏、イタリアやカタロニアなど地中海地方を舞台に活躍した吟遊詩人のことで、北仏のトルヴェール、ドイツのミンネゼンガーに相当する。歌詞は当然フランス語ではなく、オック語。

伴奏楽器がウードであることから分かるように、中世の南仏の音楽がアラビア音楽の強い影響にあったことがはっきりと出ている。言わずに聞かされたら、確実にアラビア音楽だと思うだろう。古代ギリシアの音楽理論はアラビア圏、特にペルシア人に受け継がれ、12世紀以降ヨーロッパに入ってくることは知ってはいたが、これほどまでに強い影響下にあったとは正直驚きである。

彼らとは、2015年の夏、フランスはブルターニュ、ロストルナンで開催されたフェスで知り合った。というか、彼らは出演していたのだ。終演後、友達に「ヴォーカルのマニュ・テロンはフランスのトラッド音楽界ではすごい有名な人なんだよ」と言って紹介してもらった。私が詩の研究をしているというと、マニュは「(12世紀南仏の詩人である)ベルナルド・ド・ヴォンタドゥールを読んでみないか？ オック語なら教えてやるから」と身を乗り出してきた。いやいや中世のフランス語だけでも大変なのに（ラテン語の知識は必須）、オック語なんてとてとて、第一マニュはマルセイユ在住だというし、習うと言ってもそれはちょっと、というのが正直なところである。

しかし、できればやってみたい、と思わせるほど、彼らの演奏は素晴らしい。特に、これらの楽曲を歌いこなすには、オック語の習得はもちろんのこと、オ

ック語での詩の規則、詩の意味内容まできちんと把握することが求められる。マニユの学識とテクニックたるや、私のようにオック語がわからないものにも、一目瞭然である。

ワードはフレットレス。当然、平均律ではない。微妙は微分音階を見事に弾きこなす。

なお、最近日本でも見かける「ロクシタン」は「オクシタニアの」という意味、南仏出身のショップであることを言い添えておく。

テロに対してどう対処すべきか

純正律音楽研究会 正会員
弁護士 齋藤昌男

第1. 緒論

テロに対してどう立ち向かうべきか。誰もが心を痛めている問題である。筆者も全く回答のないまま、多くの新聞、総合雑誌、書籍等を読んで、体系的に纏めてみた。

特にオスマン帝国の崩壊、第1次世界大戦中のイギリスの3枚舌外交、第2次世界大戦、2003年ブッシュ大統領によるアメリカのイラク攻撃という大きな流れを見ると、今日の「イスラム国」の問題も、見えて来るものがある。そこで、まず、「イスラム国」の問題を歴史的に見るために事実関係を記した時系列表を作成し、イスラム世界の現状と「イスラム国」問題の対策は、全て識者の言の引用でまとめることにする。

第2. 時系列表

○1299年から1922年まで

バルカン半島を中心としてオスマン帝国が栄えた。

○1867年から1918年

オーストリア・ハンガリー帝国

○1908年

オーストリアはボスニア・ヘルツェゴヴィナ併合。しかしセルビア人の反オーストリア熱は強まり、のちのサライエヴォ事件、したがって第1次世界大戦を生む導火線となった。

○1912年

第1次バルカン戦争（～1913年）

バルカン同盟諸国（ブルガリア、セルビア、モンテネグロ、ギリシャ）とオスマン帝国（トルコ）との戦争。トルコはトリポリ戦争（伊土戦争）で国力を消耗していたので、戦闘3ヶ月で休戦を求めた。トルコは、マケドニア及びトラキアの2地方をバルカン同盟諸国に譲渡。

○1913年

第2次バルカン戦争

第1次戦争の戦利品であるマケドニアとトラキアの分配をめぐって戦勝国間に紛争が起った。セルビアは、アドリア海への出口を獲得したが、オーストリアの干渉でそれを放棄させられたので、セルビアとオーストリアの関係がますます悪化。

○1914年6月28日

当時オーストリアの支配下にあったボスニア州のサラエヴォでオーストリア皇位継承者のフランツ・フェルディナントとその妻がセルビアの一青年によって暗殺された。

○1914年7月28日

オーストリアはセルビアに宣戦布告。
第1次世界大戦勃発（～1919年）

○1915年10月

アラブ人に対するフセイン・マクマホン書簡（反オスマン蜂起に対して、戦後の独立を約束）。この約束を信じたフセインは、「アラブの反乱」を起さず。イギリスがアラブ反乱軍との連絡役として送り込んだのがトーマス・エドワード・ロレンス大佐、通称アラビアのロレンス。彼はチェルケス人と名乗っていた。しかし、戦後イギリスは、アラブとの約束を守らなかった。

○1916年

イギリスはフランス・ロシアとサイクス・ピコ協定（秘密の分割協定）。オスマン帝国領アジアの3国による分割とパレスチナの国際管理を決めた。この秘密条約の内容は革命後の1917年ソヴィエト政府により公表された。

第一次世界大戦の戦勝国となったイギリスはパレスチナを手に入れた。そこに世界中からユダヤ人が集まってきた。

「イスラム国」（IS）は、このサイコス・ピコ体制の打破を訴えている。

○1917年11月

イギリス外相バルフォアによるユダヤ人に対するバルフォア宣言（パレスチナでの民族的郷土の建設を支持）

（第1次世界大戦中、イギリスが約束した上記3つの約束は、「三枚舌」外交とも言われ、いまの中東問題をややこしくさせた原因である。）

○1923年

トルコ共和国樹立

○1924年

トルコでカリフ制廃止。イスラム世界に大きな衝撃

○1938年

サウジアラビアで初めて石油が出た。

アラムコ誕生—のちにサウジアラビアによって国有化

○1939年

第2次世界大戦勃発（～1945年）

○1945年11月

ユーゴスラヴィア連邦人民共和国の建国が宣言された。

多民族国家のユーゴスラビアは第二次世界大戦ではドイツ、イタリアに支

配されていたが、戦後にパルチザン勢力を率いる指導者ヨシップ・ブロズ・チトーによって独立を達成する。この国は後に「七つの国境、六つの共和国、五つの民族、四つの言語、三つの宗教、二つの文字、一つの国家」といわれるほどの多様性を内包していた。(Wikipedia より引用)

○1947年11月

国際連合は、パレスチナをアラブ人たちが住む国とユダヤ人が住む国とに分ける「パレスチナ分割案」を採択した。

○1948年

イスラエル建国宣言。その翌日に第1次中東戦争勃発。エジプト、シリア、ヨルダン、レバノン、イラクの5ヵ国連合がイスラエルに攻め込んだ。

○1956年

第2次中東戦争

スエズ運河をエジプトが国営化したことに怒ったイギリスとフランスが、なんとかスエズ運河を取り戻したいと考え、イスラエルとイギリス、フランスが裏で手を握り、イスラエルにエジプトを攻撃させた。

○1967年

第3次中東戦争

エジプト、ヨルダン、あるいはシリアが攻撃しようとしていることに気づいたイスラエルが先制攻撃。これによって一挙にエジプトのシナイ半島と、シリアのゴラン高原を占領した。このとき、イスラエルは、エルサレムの西側だけでなく東側も占拠して、エルサレムはイスラエルの首都であると宣言した。

○1973年

第4次中東戦争

エジプトでは、ラマダーン戦争としてジハード意識を鼓舞。

○1979年2月

イランのパーレビ王朝が崩壊。

フランスに亡命していたホメイニが帰国して、イラン・イスラム共和国を宣言（イラン革命）。

○1979年12月24日

ソ連がアフガニスタンに侵攻。

ソ連は親ソ勢力によるクーデタを支援するためであったが、結局失敗（～1989）。

○1980年5月

ユーゴのチトー大統領死去、集団指導体制に移行

○1980年～90年代

コソボは、長らくセルビア共和国内のコソボ自治州となっており、コソボの独立を目ざすアルバニア系住民と、それを認めないセルビア当局の争いが続いてきた。この紛争が、旧ユーゴスラビア連邦解体のきっかけとなった。

○1980年9月

イラン・イラク戦争（～1988）。

イスラーム革命防止のため、イラクがイランに侵攻。

- 1981年10月
サダト大統領殺害（ムスリム同胞団による）
- 1989年
米ソ首脳が会談し、冷戦終結を確認
- 1990年8月
イラク軍のクウェート侵攻（イラクとクウェートは、オスマン帝国の時代はひとつであった。それをイギリスが占領し、イラクとクウェートに分割し、クウェートを先に独立させた）。
- 1991年1月
国際連合が多国籍軍をイラクに派遣。
クウェートを奪回（湾岸戦争）
- 1992年3月
ボスニア・ヘルツェゴビナ独立を宣言。
当時、同国には約430万人が住んでいたが、その内44%がボシュニャク人（ムスリム人）、33%がセルビア人、17%がクロアチア人と異なる民族が混在していた。ボシュニャク人とクロアチア人が独立を推進したのに対し、セルビア人はこれに反対し分離を目指したため、両者間の対立はしだいに深刻化。独立宣言の翌日には軍事衝突に発展した。（Wikipediaより引用）
およそ3年半以上にわたり全土で戦闘が繰り返された結果、死者20万、難民・避難民200万が発生したほか、ボシュニャク人に対して、所謂民族浄化がなされた。
ボシュニャク人の多くはイスラム教、クロアチア人の多くはキリスト教（ローマ・カトリック）、セルビア人の多くはキリスト教（正教会）である。ちなみに隣国アルバニアはイスラム教。
- 1993年8月
国連、ボスニアの州都サラエヴォを管理。内線続く
- 1993年9月
オスロ合意（パレスチナ暫定自治宣言）
- 1994年11月
NATO軍、セルビア人勢力地帯を空爆。ボスニア内戦は激化
- 1995年5月
NATO軍、国連の要請でボスニア・ヘルツェゴヴィナのセルビア人武装勢力拠点に空爆
- 1995年11月
イスラエルのラビン首相が暗殺される。
- 2001年9月11日
同時多発テロ
ハイジャックされた2機の民間航空機がニューヨークの世界貿易センタービル、南北2棟へ、1機が首都ワシントンの国防総省ビル、もう1機がペンシルベニア州ピッツバーグ郊外に墜落し、3025人の死者、6291人以上の負傷者を出した自爆テロ事件。合計19人といわれる犯人は、ハイジャックしたのと同型機の操縦訓練を受けるなど、周到に計画、ニューヨークの

ケネディ空港、ボストン空港、ワシントンナショナル空港をほぼ同時刻に離陸した民間機を離陸後まもなく乗っ取り、満タンの燃料を武器としてそれぞれの目標に突っ込み、乗員及び搭乗者の人質もろとも自爆した。容疑者はアルカイダと言われている。(細谷正宏氏の記述より引用)

- 2003年3月
 - アメリカがイラクを攻撃
 - 理由は2つ
 - 大量破壊兵器に関する制裁
 - フセイン政権の圧政から国民を解放すること
- 2004年
 - PLOのアラファト議長が死去。
- 2005年7月7日
 - 朝のラッシュ時に、ロンドン地下鉄3ヵ所と2階建てバスが同時に爆破され自爆犯4人を含め56人の死者と、約700人の負傷者を出した。2週間後の21日に2度目のテロが発生した。
- 2008年2月17日
 - セルビア、コソボ自治州が独立宣言。セルビアは抗議。米・中・EU諸国・日本は独立承認へ。ロシアは不承認。
- 2010年12月
 - 北アフリカに位置するチュニジアで、ひとりの青年が抗議の焼身自殺をしたことをきっかけに「アラブの春」が始った。
- 2014年6月
 - ISはイラクの第2の都市モスルを制圧
- 2015年
 - (1) ISは人質に取った日本人の後藤健二さん、湯川遥菜さんを殺害すると脅迫し、2億ドルの身代金を要求。後に2人の殺害映像を公開した。
 - (2) 1月7日
 - フランスのパリで週刊紙シャルリー・エブド本社を襲撃、17人が死亡
 - 風刺画を売り物とする仏パリの週刊新聞「シャルリー・エブド」が襲撃され、編集幹部や記者、風刺画家、警官らが犠牲になった。襲撃した2人の容疑者はその後、パリ郊外で人質を取って立てこもった。ほぼ同時にパリ東部でも別の容疑者による立てこもり事件が発生。3容疑者はそれぞれ当局が射殺、三つの事件で計17人が犠牲になった。3容疑者はいずれもイスラム過激思想に染まっていた。(2015-03-03 朝日新聞 朝刊 オピニオン1)
 - (3) 3月18日
 - チュニジアの首都チュニスで博物館襲撃、22人死亡。日本人も含まれている。
 - (4) 6月26日
 - チュニジアの観光地スースでホテル襲撃、38人が死亡
 - (5) 6月26日
 - 首都クウェートで自爆テロ、27人死亡

(6) 10月10日

トルコの首都アンカラで自爆テロ、100人以上が死亡

(7) 10月31日

エジプトのシナイ半島上空で爆弾テロのため224人乗りロシアの旅客機が墜落。

(8) 11月12日

レバノンの首都ベイルートで45人が死亡。約240人が負傷する連続爆破テロがあった。「イスラム国」(IS)の犯行

(9) 11月13日

パリで同時多発テロ、130人が死亡

事件発生時、サン＝ドニにあるスタジアムスタッド・ド・フランスでは、男子サッカーのフランス対ドイツ戦が行われており、フランスのオランド大統領とドイツのシュタインマイヤー外務大臣も観戦していた。現地時間(CET)午後9時頃、同スタジアムの入り口付近や近隣のファストフード店で爆弾とみられる爆発音が3回響き、実行犯とみられる人物が自爆テロにより4人死亡、1人が巻き込まれて死亡した。

その後、午後9時30分頃より、パリ10区と11区の料理店やバーなど4か所の飲食店で発砲し、多くの死者が出た。犯人らはイーグルス・オブ・デス・メタルのコンサートが行われていたバタ克蘭劇場を襲撃し、劇場で観客に向けて銃を乱射した後、観客を人質として立てこもった。14日未明にフランス国家警察の特殊部隊が突入し、犯行グループ3人のうち1人を射殺、2人が自爆により死亡したが、観客89人が死亡、多数の負傷者が出た。

(wikipediaより引用)

(10) 12月8日

米国カリフォルニア州の福祉施設で銃撃事件、14人が死亡

○2016年

(1) 1月4日

イスラム教スンニ派の盟主サウジアラビアがシーア派のイランと外交関係の断絶を表明

サウジアラビアがシーア派の有力な宗教指導者ニムル師ら47人の死刑を執行したのは1月2日。イランでは、怒った群衆がすぐさま首都テヘランのサウジアラビア大使館を襲撃した。

バーレーンとスーダンも1月4日、イラクとの外交関係を断絶すると相次いで表明した。

アラブ首長国連邦(UAE)もイランとの対決の姿勢を強めている。

(2) 1月12日

トルコのイスタンブールの旧市街地であるスルタンアフメト地区で自爆テロ。10人が死亡、15人が負傷。

(3) 1月14日

インドネシアの首都ジャカルタ中心部でテロ。実行犯5人を含む少なくとも7人が死亡。24人が負傷。「イスラム国」が犯行に関与したと主張する声明を出した。

(4) 1月15日

西アフリカ・ブルキナファソの首都ワガドゥクで、高級ホテルがイスラム過激派の武装勢力に襲撃された。宿泊客20人以上が死亡。30人以上が負傷。イスラム・マグレブ諸国のアルカイダが犯行声明。

(5) 1月21日

パキスタン北西部のチャルサダにある大学で武装集団が押し入り、銃を乱射。学生ら少なくとも20人が死亡、30人以上が負傷。パキスタン・タリバーン運動(TTP)が犯行声明。

第3. イスラム世界の現状

(1) 塩野七生氏 (2015年12月20日 日本経済新聞)

『イスラム世界は中産階級をついに作れなかった。それが民主政が成り立たず、社会が安定しない原因でもある。商人階級は作りました。北アフリカのイスラム世界はサハラ黄金を売っていた。今ならばオイルです。原料を輸出する側はそれだけでもうかる。工業製品を輸出する側は、例えばフィレンツェやベネチアだったら繊維業で、色を付ける、織るなどの過程がある。その人たちに職を与えることになった』

○ 『イスラム世界は人々に高学歴を与えることはできた。しかし今なお高学歴にふさわしい職場を作れていない。だから軍隊とかバース党(アラブ主義政党)のような所に貧しい秀才が流れてしまうのです』

○ 「—シリア情勢や難民問題をどう見ますか。

『古代ローマ時代はどうかと言えば、難民は受け入れた。ただし完全に自助努力を求めた。つまり『働け』と。今のヨーロッパでは人権は尊重し、国民と同等の待遇を与えなければいけない。若い男たちが大勢収容されて何もしないと、周囲からだんだん敵視されていく』

『結局、難民問題の元は国の内乱にあるわけです。アフリカは土壌として豊かですが、内乱になれば逃げ出さざるを得なくなる。捨てられた耕地は何かも枯れてしまう。雨も降らない。こうなるとますます人間が住めない。』

(2) 石油で5億ドル稼ぐISIS 供給独占、空爆の効果薄く (Financial Times 特別日本版 2015年12月17日)

「イスラム過激派の原油収入は、徴税、ゆすり、盗難美術品の取引などから得る収入のいずれをも上回る

1年に及ぶ爆撃と1万600回を超える攻撃、60カ国を超える国々の有志連合の存在にもかかわらず、『イラク・シリアのイスラム国(ISIS)』の軍資金に大きなダメージを与えられていない。ISISは原油を最大の収益源とし、年間5億ドルもの資金を得ている。

油田作業員から入手した石油生産関連のデータを西側情報機関の推計値と照らし合わせると、ISISの支配地域では日量3万4000~4万バレルの原油が生産され、1日当たり最大153万ドルの収入を生んでいるようだ。

西側諸国の上級外交官や情報機関の幹部は、米国主導のISISとの戦いが失敗していると率直に認める。ISISの財務力を再評価したところ、まだ同組織の作戦をそぐほど資金が枯渇していないことが分かったと述べる。

I S I Sの収入源に現地でかかわっている人々への数十回に及ぶ本紙の取材でもこの見方は裏付けられている。

米国主導のI S I S攻撃に欧州や中東、ワシントンなどで関与している上級幹部によれば、I S I Sは空爆に合わせて作戦行動を変えている。商いの拠点やルート網は無傷で、国営石油会社のように油井から大量の原油を汲み出している。ある米政府高官は『今年はたった1カ月の間に（石油で）4000万ドル稼いだと試算している。それも空爆の後に』と言う。

有志連合は爆撃を繰り返しているが、I S I Sの石油事業はなかなか崩壊しない。ここに、I S I Sを権力の座から追い落とす難しさがある。」

(3)縮む世界 開く心の距離（2015年12月6日 朝日）

「地元の高校の子どもたちに、スマートフォンの通信アプリなどで普段やりとりする相手を聞いた。多くが、離れた場所に住む『同じエスニック（民族）集団の人』と答えた。クラスで机を並べているから、当たり前になりとりが生まれていたわけではなかった。

スマホのおかげで、移民やその家族が、インターネットで他の地域にいる『母国』の友人や親族とつながりやすくなった。それ自体は悪いことではないが、ラローズ（アムステルダム南東地区・元区長）は『技術の発展で世界の距離は縮まったが、異なる文化や民族の人と直面して生きていく必要がなくなった』とみる。」

第4. 解決策

(1)トマス・ピケティ氏 パリ経済学校教授

（2015年12月1日 朝日，11月22日付 仏ルモンド紙）

- 「明白な事実をひとつ挙げよう。テロリズムは、不平等が蔓延する中東の火薬庫で生まれたのだが、その責任は私たちに大いにある。I Sを生んだ直接の原因はイラクの体制崩壊だが、一般的には、1920年にこの地域で確立されていた国境管理体制が崩壊したことにある。
1990年～91年にイラクがクウェートを併合した後、主要国は連合して多国籍軍を送り込み、石油を中東の首長たち、つまり欧米の企業に戻した。ここに、テクノロジーを駆使した非対称の戦争の新時代が幕を開けたのである。」
- 「宗教的な対立以外にも、人口密度の薄い限られた土地に石油資源が集中していることが、中東の政治社会体制に重くのしかかり、力を弱めている。エジプトからシリア、イラク、アラビア半島を経てイランに至る人口約3億人の一帯を調べてみると、石油資源をもつ君主国が地域の国内総生産（GDP）の60～70%を占めている。それは、人口で10%足らずに過ぎない。ここは世界で最も格差の大きい地域なのだ。」
- 「オイルマネーは、優先して地域の発展に使われるべきだ。9千万近い人口を擁するエジプトで、2015年に教育制度全体の運営に国が使える予算は全部で100億ドル（約1兆2300億円）に届かない。そこから数百キロ先のサウジアラビアで、石油収入は3千億ドルに達する。カタールでは1千億ドルを超える。これほど不平等な発展モデルの行きつく先は、破局

しかないだろう。それを容認するのは罪だ。」

- 「残された疑問は、フランスで育った若者たちが、なぜバグダッドとパリ郊外とをごっちゃにして、かの地の紛争をこちらに持ち込もうとするのかだ。どんな事情があるにせよ、この残忍で暴力的で悲惨な行為を言い訳することはできない。ただ、失業と就職差別が事態を好転させないだろうことには、留意すべきだ。」

- (2)ジャンピエール・フィリュ氏 パリ政治学院教授 「『イスラム国』が狙ったフランスの分断」(中央公論 2016年1月号 32ページ)

「空爆は全く効果的ではない。米国主導の空爆開始以来、『イスラム国』支配下の住民は当初の100万人から900万人に拡大した。支配領域はヨルダン並みの面積だ。空爆はむしろ『イスラム国』の勢力拡大を招いたと言える。空爆では勝てない。

唯一の道は、アサド政権と『イスラム国』の排除にある。それには、国際社会がシリアで地上戦を戦っているスンニ派革命勢力と連携する必要がある。だが、米国はそれを望まない。中東に深入りすることを恐れている。米国に頼ることはできない。

フランスはじめ欧州が行動を起こし、米国が加わらなかったとしても、シリアのスンニ派革命勢力を全面支援すべきだ。鍵を握るのはトルコだ。これまでは米国、ロシア、イスラエル、イランの異なる思惑に気兼ねして身動きできなかった。欧州はトルコに働きかけ、トルコとともにシリアの革命勢力を全面支援する国際戦略を一刻も早く立てるべきだ。

現状のままでは、大量殺戮テロは繰り返される。世界のどこで起きてても不思議ではない。」

- (3)ラファエロ・パントウッチ氏 英国王立統合軍事研究所ディレクター (2015年12月3日 日経)

「明白なのはISとの戦いが長期化するということだ。米国が中心の有志連合によるイラクやシリアへの空爆の強化は、連帯を示すためのセレモニー的な意味合いしかない。最終的には地上戦に踏み込む必要がある。同時に、中東の膨大なイスラム教スンニ派の人々が、同じスンニ派のISに圧力をかける道を探ることが重要だ。」

- (4)ジャンマリー・ゲーノ氏 国際危険グループ(ICG)会長 (2015年12月11日 朝日)

「ただ、ISの力をあまり大げさに考えてはいけません。イスラム教スンニ派の範囲を超えては広がらないからです。ISはその宗派性ゆえに台頭しましたが、宗派性ゆえの限界も抱えています」

- (5)ジェフリー・サックス氏 米コロンビア大教授 (2015年12月7日 日経)

「最後に、中東の不安定さを長期的に解決する方法は、持続可能な開発にある。中東全体が戦争だけでなく、悪化する淡水不足、砂漠化、若者の高い失業率、劣悪な教育システムなど、深刻化する開発の失敗に苦しんでいる。

もっと戦争をしても、特にCIAが支援する欧米主導の戦争では、何の解決にもならない。中東と世界のより安定した将来のカギを握るのは、教育、

医療、再生可能エネルギー、農業、インフラに対する内外の投資の拡大だ。」
(6)池上彰の大岡山通信 (2015年12月7日 日経)

「パリのテロ後、『日本は大丈夫か』と心配する声を聞きました。こういう心配をする人たちは、テロリストが『外からやって来る』と思い込んでいるのですね。

貧困ゆえに十分な教育が受けられず、就職できずに貧しい生活を強いられ、育った国を憎むようになる。こんな負のサイクルは、日本だって他人ごとではありません。

日本での『テロ対策』には、直接の警備だけではなく、親の所得に関係なく十分な教育を受けられる仕組みをつくることも必要なのだ。パリの街を歩きながら、思いは日本に飛んでいました。」

(7)エフライム・ハレビ氏 元イスラエル諜報特務庁(モサド)長官 (2016年1月22日 朝日)

外交の鍵 ISに共闘できる

「インテリジェンスとは単に情報を集めるだけでなく、敵と戦う手段でもあります。常に優勢を保つため、絶え間ない紛争の水面下で敵に気づかれることなく、事に当たらなければなりません。敵が何をしたいのか、どんな武器がほしいのかといった情報を集める。そのうえで、敵の攻撃を妨害するためのオペレーション(作戦)も行います。動向を情報収集するのはもちろん、ときには敵に武器が渡らないよう第三国に働きかけることもあります。作戦について詳しくは話せませんが、我々に損害を与えたいと考える敵に、そのための能力を与えない。我々は、そのことによりかなり成功してきたということだけは言えます。

外交官も情報を取りますが、この種の秘密情報収集は情報機関の仕事です。だから世界中のあらゆる国が情報機関を持っている。日本も例外ではないでしょう。」

- 「過激派組織『イスラム国』(IS)のような新しい脅威に対しては、まずは内部に情報源をつくり、ISが何をしたいのか、情報を得て、テロを防ぐ努力が必要です。日本もまたISの情報収集が必要です。そのためにどうしたらいいか。公にはできないが、日本の情報機関が求めれば、我々は話をするでしょう。」

(作家佐藤優氏の言によれば、一番狙われておかしくないイスラエルが一番テロが少ないと言う。それはこのインテリジェンスのおかげである様である。日本はまずインテリジェンスについてイスラエルに学ぶべきであろう。)

(2016年1月30日脱稿)

以上

遺作小説連続 4 回【またしてもモーツァルト】
第四回

玉木宏樹遺作

1991年十二月、モーツァルト音楽祭は全世界にわたっていろいろな催しが行なわれ、いまや最高に盛り上がりを見せていた。ザルツブルグおよびウィーンでは、年明けから各全集ものの演奏が行なわれ、十二月に入ると、遂にオペラの全曲通し公演という大イベントで賑わっていた。

各国それぞれ装いをこらし、音楽会やシンポジウムを繰り広げていたが、その中でもひとときわ脚光を浴びたのは、舞矢提案によるモーツァルトスタイルの作曲コンクールであった。

国ごとの分担に応じ、日本は東京でそのコンクールを主催することになっていた。下馬評では一部二部とも舞矢が本命と目されていたが、二部のエントリーを舞矢が放棄したため、全体としてますます興味深いものになった。

十二月一日から六日までが一部、八日から十三日までが二部の発表である。そして、結果は各国から集まった百人の音楽関係者による二日間の協議のすえ、十六日に発表されることになった。

コンクールは連日連夜、興奮にわきかえる聴衆のなかで続けられ、十六日の審査発表の日にはさしものアリーナ東京も、特別場外席を用意しなければならないほどの満員盛況であった。

一部の優勝者はさしたる反対者もなく、満場一致で舞矢十四に決まった。病気も直り、新たな気分でフッキれた舞矢の会心作であれば、衆目の一致するところで、当然といえば当然のところであった。

面白いのは二部の方である。舞矢の推薦によって百舌有人の名でエントリーしたモーツァルトには譜面審査の段階からすでに眉をひそめた人が多かった。それも内容についてというよりはその胡散臭げな名前に対してのようだった。

百舌有人の曲は最終日に演奏された。二百年の歴史を集大成したすさまじい生命力のその曲の威力は、その日まで演奏された数多くのものをことごとく粉碎してしまった。

一楽章は二百年前の本人の様式に乗っとり、いとも優雅に始まった。一転して二楽章はワーグナー風で残忍なまでにエロチックで、三楽章はスケルツォとはいえ、強烈にグロテスクな、バルトークとストラビンスキーを足して二倍にしたような奇怪な曲であった。そして終楽章は、レーザー・シンセとエレキサウンドを駆使し、スクリヤビンが妄想しながら実現できなかった、色彩と音響によるあまりにも刺激的な官能の法悦境が渦巻いた。

オーケストラとエレキグループは疲労困憊で腰を抜かし、聴衆の方もこれまたあまりのエゲツない刺激にしばし茫然。数分に及ぶ虚脱した静寂の後に嵐のように沸き上がった拍手とブラボーは延々十分にもおよび、モーツァルトは何度も何度も指揮台に戻らねばならなかった。その前代未聞の異常な反響からして百舌有人の優勝はもはや決定的であった。

ところが驚いたことに彼の作品はもの見事に落選してしまい、六位入賞にもおよばなかったのである。

公式のパーティーに散々ふりまわされた舞矢が、身内五人だけの内輪のパーティーを開くことが出来たのは、年も明けて一月十五日であった。

マリ子の精一杯の手料理を前に、誰を祝うのか、成人式の乾杯でそれは始まった。

久しぶりに逢うモーツァルトの落胆ぶりを懸念していた舞矢だったが、意に反してモーツァルトは円満しごくだった。

話題はほどなく当然、百舌有人の作品のことになった。

栄養には全くこだわっていないモーツァルトを見てホッとした舞矢は審査結果を報告した。

「多分、みんながみんな、ヴィルフィの作品を認めたことは事実だと思うよ」

「じゃ、なぜ審査員だけが反対したのかね」と鷹橋。

「違うんだよ。彼らもあの曲を聞いていたときは全員そのつもりでいたんだよ。みんなほんとのことは言わないけど、顔を見ればわかるよね」

「顔のことはあまり話題にして欲しくないんですけど」と田中。すかさずアバタだらけのモーツァルトがそうさそうさと言ったので一同大爆笑である。

「結局のところ、聴衆のあの異常な反応が審査員に逆効果を与えたらしいんだよね」

「いつまでたっても愚かしさというものは付きまとうもんだ」とモーツァルト。

「で実のところ、冷静な判断というものはひとつもなく、みんながみんな感情的になり始めてね、收拾つかなくなっちゃった」

「非難の根拠は何なのかね」と鷹橋。

「おおかたの意見をまとめると、モーツァルトはあんなに下品じゃないって言うんだよ。だからその下品さってのは何なんだって反論するのは約一名、ぼくだけさ。するとね、皆が皆興奮して言うのさ。真に芸術的な作品はあのように聴衆を興奮させるものではない、あれはおかしい、真に芸術的なものは一回だけで理解できるはずがない。であるからしてあれは下品で浅薄でつまらないものであるという結論になってしまったんだよ」

「素直じゃないですねえ」と田中。

「私も昔、そう思ってたときがあったわ。楽々と歌えて難しくない曲なんて程度が低いんだってね……。でも違うわよ、あんなにわかりやすくて、それでいて本当に興奮できて、本当に涙がでちゃって、本当にもう一度聴きたい曲なんて、本当に本当にあれ以外にないわよ」

話しながら自分に興奮するたちのマリ子らしく、はや涙声である。

「曲の中身についてはどうだったのかね」

モーツァルトの方ははごく冷静に客観的にきく風情。

「それがまたひどいもんでねえ、モーツァルトは本来もっとクールなはずだ、均整がとれていてどこにも破綻は見せない、例えば君の曲のようにだと言ってぼくのことを引合に出すんですよ」

「それじゃ君は、まるでモーツァルトを裏切った曲を作ったことになるね、そうでしょうモーツァルトさん」と鷹橋。

「いやいや、あれは実に素晴らしい作品ですよ。でも私の好みのなかでは中の上だね」

一同大笑いである。

「一番傑作だったのはねえ、ヴォルフィ」調子にのった舞矢は言わなくてもいいことまでしゃべりだした。

「我れこそ正当ドイツという、いかめしい面白くもないある審査員がね、こう言ったんだ。＜あいつのツラが気に入らねえ、それに指揮する態度もだ。ちっこい体して、身振り手振りばかり派手で飛んだり跳ねたり。顔を見りゃ、アバタだらけで貧相な顔して、あの偉大なモーツァルトはあんな顔つきをしてるはずがない＞って言ったんだよ」

これには全員はじけるような爆笑が伝染し、のたうち回って床を叩き、テーブルを蹴つとばし、その悪性の馬鹿笑いを止めるのが誰もいない雰囲気の中で、それまで一番激しく笑い転げていたモーツァルトが、つと真顔になって発言した。

「チビでアバタだらけで貧相な顔して、あの偉大なモーツァルトはそんな顔つきをしていないっていったんだね……、それじゃ、それじゃ……私はいったいどんな顔をしていればいいんだい……」

モーツァルトとの悲劇的な別れは、その一言に発したのかもしれない。

それに気づかなかった舞矢は、功成り名遂げた存在として、プロデューサーとなり、百舌有人を売り出すための音楽事務所を設立したのであった。

入賞すら出来なかった百舌有人でも、その才能を人々が放っておくわけはなく、半年ほどの間に世界中で一番忙しい作曲家になってしまったのであった。

仕事は面白いように舞いこんできて、しかもモーツァルトはいとも簡単にそれらをこなしていった。

舞矢は外面上プロデューサー兼マネージャーをつとめ、内ではモーツァルトの作曲をてつだうのが日課になっていった。マリ子とモーツァルトは舞矢の勧めた新居に移っていった。

しかし、恐ろしい破局は瞬時にして襲ってきたのである。

前兆はマリ子とモーツァルトの不仲に始まった。些細なことで喧嘩したマリ子は舞矢にすがりつくようにグチをこぼしに来た。

「私、もう駄目、あの人が信じられない」

「どうしたんだい、さすがのヴォルフィも女にはお手上げかな」

「お願い、ちゃんと聞いて。前からいろんなことでリズムは合わなかったの。ずっと我慢してきたのよ。でも今日はほんとにひどいことを言われてもう……」

「ブスとかブタとか、モーツァルトも昔から口が悪いから」

「違うわよ、そんなことだったら私だって、このチビ、アバタって言い返せばすむわよ。あの人が私になんていったと思う？ 私に向かってお前はまるでコンスタンツェみたいだっていったのよ……。あんまりじゃない……。それまでだって私はマリ子だマリ子だとあの人に言い続けてきたのに、いやお前はアロイジアだといって私のことを認めようとはしないのよ……。それはそれでも私のことを愛してくれているのなら我慢もできるわ。でもね、今日あの人、私のことをコンスタンツェだといったのよ」

気性の激しいマリ子は段々とヒステリーじみていった。

「もういい加減にして欲しいわ。私は私、マリ子なのよ。アロイジアでもコンスタンツェでもないのよ。あの人はちっとも私のことをわかっちゃいないの。いくらいっても私がマリ子であることをわかろうとしないのよ」

二人の間に入るのはいささか気の重い舞矢だったがこれもマネージャーとしては重要な仕事である。真意をただしてみるつもりでモーツァルトの新居を訪問した。

「お前がなにしに来たかくらいはわかってるぞ、馬鹿女のコンスタンツェが差し向けたんだろう」

「よく聞いてください、ヴォルフィ。あの人はマリ子であって、アロイジアでもコンスタンツェでもないんです。彼女をいじめないでください」

「何を？ 私があの女をいじめてるって？ 冗談じゃない、苦しめてるのは向こうのほうなんだよ。それにお前がそんなことをいえた義理か！ 馬鹿もの！」怒って赤くなるとアバタはよけいクッキリとなってくる。

「ええい、グダグダ文句をいうんじゃない、なにかいいたいことがあるんならその前に本物のアロイジアを連れてきてからにしろ！ この私を二百年も飛ばしてしまったお前たちだ、アロイジアを連れてくることくらい簡単なものじゃないか、えっ！」

無茶苦茶な言い分ではあっても、ことの発端はすべて舞矢の方にある。無用の反論をさけてスゴスゴと引き下がらざるをえなかった。

その件以後マリ子は、コンスタンツェのような自堕落な生活に陥り、モーツァルトのことは一切意に介さなくなった。

音楽祭を半年くらいすぎたところから、モーツァルトの作風は見る見るうちに荒れだし、頻繁に前のメロディを使い回すようになってきた。それがなんと二百年前のモチーフであるから、その古臭いことは一聴瞭然で、マネージャー役の舞矢の所にはキャンセルが続出し始めた。

ことの成り行きを心配した舞矢はある日、意を決してモーツァルトを訪れた。モーツァルトは一人きりで窓際に座り、旧式LPの一曲を聴いていた。眼は心なしかうるんでみえる。曲は、前期ロマン派の誰かのピアノ協奏曲らしいが、舞矢は全く思い出せなかった。退屈なフレーズが続き、取り立てて気を引くメロディもなく、全然才能のひらめきのない二流以下の作曲家のようだった。

「誰の曲ですか？」

振り向いたモーツァルトの眼は悲痛な表情を帯びていた。

「お前でも、わからないのか」

「レコードもあまりたくさんになると……、全部覚えてるとは限りません」

「そうか、やっぱりそうだろうなあ、こんな曲じゃ……」

「あまり面白くないけど誰なんですか？」

「クサファーなんだよ」

「えっ！」

「ジュスマイヤーじゃなくてね、わが子……、フランツ・クサファー・モーツァルトなんだよ。なんという惨めつたらしい、臆病な……、これはまるで生气というものが感じられないね。同時代の作曲家たちと較べてごらん、なんというザ

「まだ、これが-----、これがわが子クサファーなんだよ」

そういえば、モーツァルト一家云々というタイトルのレコードがあったことを舞矢は思い出した。

フランツ・クサファー・モーツァルトは 1791 年に生まれ、1844 年に死んでいる。あまりにも偉大な父をもった彼は、死ぬまでそれを乗り越えられなかった。いつもどこへ行っても<あのモーツァルトの息子>としか呼ばれず、自らいじけていった人である。

「かわいそうに、一生、私の影に脅えていたんだろうなあ-----。音楽とは権力への意志でもなく、感情の代弁でもない。大いなる宇宙、神との交感なんだよ。なのにここには臆病さと気弱さしかない-----。哀れなもんだよ、いまの私と全く同じだよ」

「ええ、何を言うんですヴォルフィ、あなたはクサファーではなく、偉大な、偉大すぎるほどのヴォルフガングじゃないですか」

「お前が何を言いに来たかくらい、察しはついている。もう私は書けないのだよ。クサファーと全く同じで、過去の私に脅えているのだよ」

「過去も現在もなくあなたは-----」

「違うんだよトシ。私はただの百舌有人なんだよ。いまの私がどんな言い曲を書いても、ただのパロディでしかないんだ。注文はどんどん来るけど、すべて使い捨てじゃないか。ましてや、どんなに叫んでも私がヴォルフガングであることは人は信じない。いまの私はいったい何者なんだい、どう考えても馬鹿馬鹿しい百舌有人でしかないじゃないか。しかも二百年を越えて過去の私以上のものを書かねばと毎日毎日脅えながら生活をしている-----。そして、自分では最高だと思うものも人は評価しないで使い捨てにしていく-----。

駄目だ駄目だ、もうおしまいにしてよう、こういう猿芝居はな」

「あなたがヴォルフガングであることは、我々四人がいちばん良く知っています。いつかきっと晴れてあなたのことを-----」

「気休めはやめにしよう。靈感を帯びた曲なんていつ生まれるか知れたもんじゃない。昔、私は生活苦に追われて、雑誌の募集にまで応じたことがある。でもあの曲は本当に素晴らしい」

「<春への憧れ>ですね」

「どんなに生活に追われても、自分はヴォルフガングであることにほこりを持ち続けていたからこそ書けたんだよ。だから私は堂々とピアノ協奏曲の三楽章に使い回してるんだ-----。

お前がなにを言いに来たのかはよくわかっている。しかし、あの時の使い回しと今では全く違うんだよ。私はもう書けなくなってしまったんだよ。自分の誇りをもてなくなって、自分自身に脅えているようじゃ最悪じゃないか-----」

涙はとめどなく頬を流れ、むせびながらとぎれとぎれにしゃべり続けるモーツァルトの姿は、あの栄光に満ちた人とはまるで別人のようであった。

その日を境にモーツァルトは生来の酒好きと博打好きの性癖をあらわにしていた。

破滅の近づくのは思ったより早く、モーツァルトは一挙に健康を害し、原因不明の内蔵疾患でベッドにふせるようになってしまった。鷹橋の診断でも、もう

長くはないとのことだった。病状はまったく二百年前と同じ、いやそれ以上に悪化していたのである。

わがままと横暴にたえかねて、マリ子はほとんどモーツァルトに寄りつかなくなった。舞矢は誰に言われるまでもなくすべてに耐えて、モーツァルトに仕えるつもりだった。

衰弱が激しくなるにつれ、モーツァルトの癩癩と短気は手に負えなくなってきた。視力の衰えたモーツァルトは舞矢を枕元に呼びつけ、支離滅裂なフレーズを口ずさんでは、それを譜面に書き取るよう強制する日が続いた。だがモーツァルトの口からでてくるのは、全く音楽とはいえない罵りとあざけりばかりで、それを譜面にしないとっては舞矢をいじめ抜き、ただそれだけを生きがいとしているかのようにだった。

鷹橋から、あと一週間の命だと宣告された日、外出から帰ってみると、モーツァルトはただならぬ様子である。はれあがったまぶたと必死に闘いながら、眼は天をも射るかのような恐ろしい視線で天井をにらみつけていた。遂に精神に異常を来たしたらしかった。

「どうしたんです」

「来たんだよ、遂に」

「なにがです」

「悪魔の使者だ。いましがた帰っていった」

「誰も見ませんでしたよ。幻覚です」

「ちがう。この眼ではっきり見た。あいつは灰色の服を来て、私に契約書をもって来たのだ」

「しっかりしてください。そんな奴はいやしません。悪魔なんて迷信です」

「迷信じゃない。あいつは確かに言ったんだ、レクイエムを書けって」

「しっかりしてください。ウソです」

「ウソじゃない、トシ。はやく五線紙を持ってこい。書くんだ、もう時間が無い。あいつとの約束は一週間なんだ。はやく書くんだ、あいつとの闘いだ」

「あなたは二百年前にもうなされて……」

「誰のためでもない、無為無償の天国的音楽だ。悪魔とは契約してしまったが、悪魔のために書くのではない。私の音楽によって悪魔を滅ぼしてやる。トシ、早く譜面をもって来い」

これ以上逆らいようもなく、舞矢はベッドの横に座った。

「いいか、レクイエム・エ・テエエルナアム・ドオオナ・エエエイス・ドオオミネエエ……」

なんとそれは驚いたことに、二百年前に作られたレクイエムそのものだった。舞矢はほとんど全曲を暗譜していた。いま、熱に浮かされ、混濁したモーツァルトは、一生懸命に新しい曲と思いこみ、歌い続けるのであった。

モーツァルトの声からではなく、自分の記憶によって書かれていく舞矢の譜面は、いつしか彼の涙でグショグショにぬれ、インクが滲んでいった。

「キイリエエエレエエイソオオン……」

それでもモーツァルトは必死に一曲ずつを口述していった。衰弱しきって混濁した精神のなかでも、メロディだけは正確に二百年前のものを反復していた。

一日一曲のペースでは、とても全曲の十二曲は間に合わない。遂に一週間たち、やっと七曲目のラ・クリモーサに到達した。

七小節目まで書いたとき電話で口述は中断した。マリ子が自殺未遂を起こして鷹橋の病院に担ぎこまれたのである。往復に小一時間はかかるので、どうしたものかとモーツァルトを見ると、疲れ切ったのか寝息をたてている。舞矢は大急ぎで病院に向かった。

幸い発見が早く、マリ子は一命をとりとめて眠っていた。そして、宣告の日の一週間目なので、帰りに高橋をつれてきたのである。

モーツァルトの部屋は二階であった。階段を二三歩昇ったとき、モーツァルトの絶叫がきこえた。

「トシ！トシ！ こいつをつまみ出してくれ！ 早く来てくれ！ トシ！トシ！」

まさしく断末魔の絶叫である。慌てて階段をかけ昇り、ドアを開ける寸前まで悲鳴は続いていた。

ドアを開けたとたん、猛烈な悪臭が鼻をついた。ところがベッドのなかはも抜けの殻であった。ベッドに触ってみると、モーツァルトは今の今まで寝ていらしく、シーツは生温かいままで、毛布は跳ねのけられ、起き上がろうとした痕跡があった。しかし不思議なことに、密室の部屋のなか、どこをどう探してもモーツァルトの姿はなく、かき消えてしまっていた。

この時舞矢は、一切を悟ったのだった。二百年前にも全く同じことが起きたのだ。舞矢は歴史に干渉はしなかった。しかしモーツァルトを永遠の輪廻の世界へ送り込んでしまったのである。モーツァルトは永遠に死ななくなってしまったのだ。

そして、そして何ということであろう、マイヤはジュウシという名であった。

ラ・クリモーサの七小節目までを筆記したのはあの、ジュスマイヤーであった。

(完)

今後のスケジュール

【玉木宏樹メモリアルコンサート】

2016年3月27日 日曜日 昼の部 14時開演、夜の部 18時開演

会場：ラリール（地下鉄 茗荷谷駅 徒歩5分）

出演：水野佐知香(Vn.)、三宅美子(Hp.)、吉原佐知子(箏)

入場料： 3,500円（会員特別価格 3,000円）



おたより募集！

会報のご感想、ご意見、純正律音楽にまつわること等々、なんでもお寄せ下さい。たくさんのお便りを、お待ちしております。

次号の【ひびきジャーナル】にてご紹介させて頂きたいと思っております。

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 NPO 法人 純正律音楽研究会

お電話：03-5317-0291 FAX：03-5317-0289

e-mail：puremusic0804@yahoo.co.jp

<http://just-int.com/>

平成 28 年 2 月 17 日 発行責任者：NPO 法人 純正律音楽研究会

編集：相坂政夫